

2011年12月15日

北海道知事 高橋はるみ様

(社) 北海道自然保護協会
会長 佐藤 謙

安平川湿原の保全に関する意見書

この意見書は、北海道苫小牧市、勇払地方にある安平川湿原にある大規模なフェン(湿生草原)が極めて高い価値を有することを示し、将来にわたって存続を求めるものである。

1. 北海道の湿原

湿原は、湿潤な環境が維持される場所に成立し、低地から高山までさまざまな環境に成立している。北海道の湿原は、冷涼過湿であるために未分解の植物遺体が泥炭として堆積した泥炭地湿原が発達している。過湿条件では植物遺体が分解しないために養分が不足し、また、根の酸素不足のために樹木が育ちにくくなり、湿生草原が主体の植生となる。

泥炭地湿原で見られる湿生草原は、ミズゴケが優占する強酸性で低生産性の草原(ボック)とスゲ・ヨシ類からなる弱酸性で高生産性の草原(フェン)からなり、これらはそれぞれ旧来の名称である高層湿原と低層湿原にみられる湿生草原におおよそ対応する。

北海道の泥炭地湿原は、全国の湿原面積の8割を占めるという状況にあり、北海道の代表的な自然景観の一つであり、湿原環境に適応した北方系の希少な湿生動植物が生育している。湿原はまた、炭素の貯蔵、水質浄化、貯水などの機能を有し、また観光や産業の面でも重要な生態系である。

2. 安平川湿原の大規模フェンの重要性

北海道苫小牧市の北部や東部から隣接市町にわたる低地帯は勇払地方と呼ばれるが、この地域にはラムサール条約登録湿地となったウトナイ湖など、湿原が多数存在している。

こうした勇払地方の湿原群の中で、安平川湿原は、安平川の最下流域において支流である勇払川との合流点から北に広がる、両河川に挟まれ三角形に残された湿原である(図参照)。図示するように、安平川湿原に二つあるフェンのうち、北半分で道道259号線の南側に位置する大きな方のフェンは、勇払地方の湿原群の中で最大の面積を占め、道東の根釧地方を除く低地の湿原としても日本最大級の大きさを有している。

安平川周辺自然環境調査によると、2006年までの調査によって485種の維管束植物が確認されており、そのうち24種がレッドリスト種であった。1970年代の調査によると、安平川湿原の大規模フェンでは、他の湿原では認められない複数のフェンの群落型が報告されていた。最近行われた調査では、現存するフェンの群落型は、他の湿原に見られない安平川湿原特有の植物群落であった。

また、日本野鳥の会は、安平川湿原を含む安平川河口付近は苫小牧東部大規模工業基地（苫東）内にあるけれども、安平川湿原をチュウヒ、シマアオジやアカモズなどのレッドリスト種が繁殖する重要野鳥生育地として、鳥獣保護区特別保護地区指定を北海道に求めている。上記レッドリスト種は極めて希少な草原性野鳥であるが、それらの生育地として、勇払地方で最大面積となる湿生草原であるフェンが極めて重要かつ良質な環境となっているのである。

以上のことから、安平川湿原は、勇払地方に残された湿原群の中で最大のフェンを形成し、様々な貴重野生生物の生育地となっているため、この湿原は、わが国の生物多様性保全の観点から、全国レベルで特記される貴重な自然といえる。しかしながら、安平川湿原は、このような大規模なフェンを持ちながら、自然環境保全上、あるいは生物多様性保全上の保護地域の指定が一切行われていない。

3. 生物多様性保全に関する課題と提言

安平川湿原は、かつては安平川最下流部において支流の勇払川を含む広範囲の氾濫原に形成されてきた。しかしながら、この湿原を涵養してきた安平川は、1956年に本流（図中の旧安平川）がその南東側に人工的な直線河道として流路変更され、同様に、支流である勇払川においても1971年に河道の直線化が行われた。安平川湿原は旧河道が閉鎖され、大規模フェンの分布域への河川水の供給が遮断されてきたまま現在に至っており、その乾燥化が懸念される。

北海道は、安平川湿原を含む安平川最下流域の950haを河道内調整地（遊水域）として、自然環境を保全しながら治水に利用する計画を提案している（2011年3月第9回安平川水系河川整備検討委員会（最終））。この計画では、安平川湿原の大規模フェンの重要性とその保全については言及されていない。

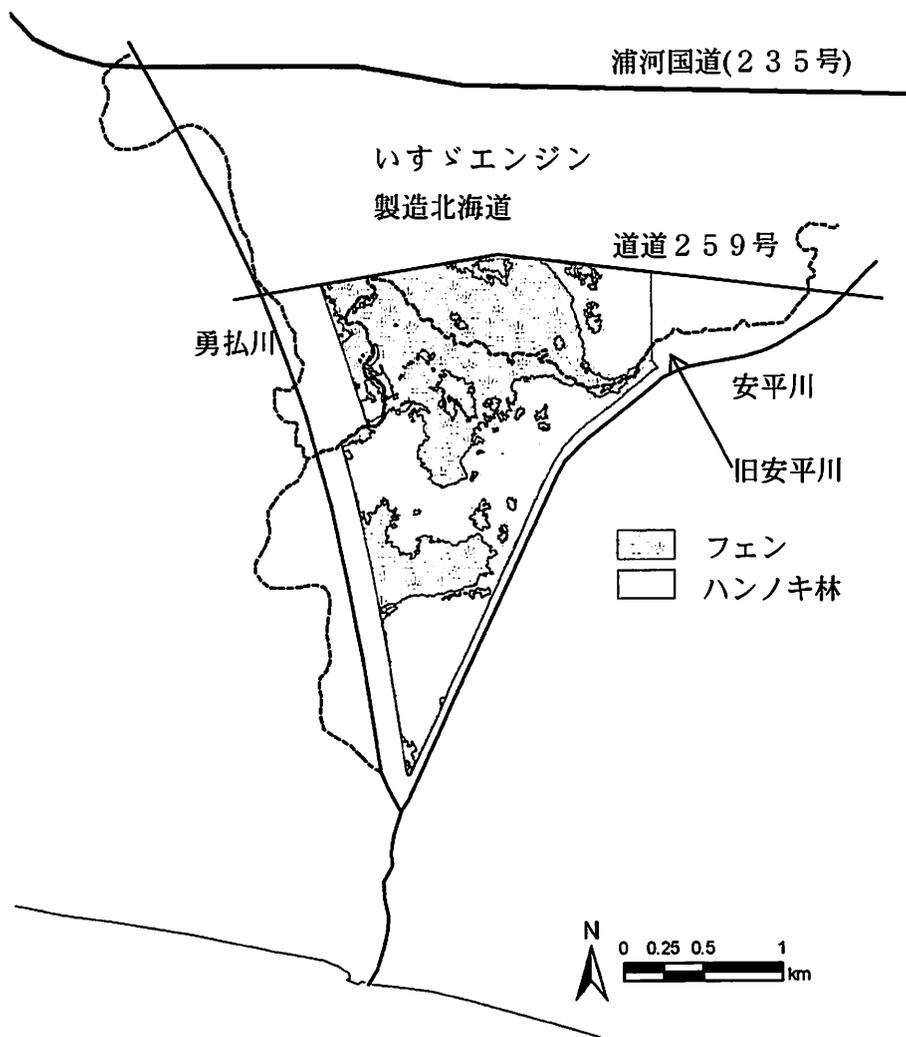
他方、苫小牧商工会議所など地元経済界は、苫小牧東部地域は工業専用地域であるので、航空産業などの企業を誘致すべきであると主張している（石原健治・加藤高明、読売新聞北海道支社朝刊「地球の叫び」2008年12月18日）。

こうした状況において、北海道が河道内調整地（遊水域）として計画する950haの具体的な形状は、2011年3月に終了した安平川水系河川整備検討委員会ではなく、今後開かれる地元の河道内調整地に関する協議会によって決定されるとされている。もしも、道道259号の南側に位置する大規模フェンの範囲が地元の意向によって、河道内調

整地から外され工業用地にされるならば、勇払地方最大で全国レベルで貴重なフェンが面積を大きく減少させ、野生生物の良好な生育地としての価値をまったく失ってしまうことになる。

北海道による河川整備計画は、河川の最下流域において、旧河道といえども氾濫の影響を被る危険性が高い範囲を河道内調整地（遊水域）として指定しようとしている。これは、治水対策として優れているだけでなく、生物多様性の保全という観点からも評価される提案である。私たちは、北海道の河川整備計画を、治水と環境保全の視点から進めることを要望する。

北海道は、2010年7月に、別途、北海道生物多様性保全計画を定めている。道内が4つの圏域に分けられ、それぞれの圏域ごとに生物多様性を保全することを推進すると述べている。この保全計画の考えに合わせると、安平川湿原の大規模フェンは道央圏域の生物多様性保全の拠点となる存在である。したがって、北海道生物多様性保全計画の観点から、この貴重な自然を手つかずに後世へ遺していくことが必要となる。このフェンは、現在乾燥化による劣化の進行が懸念されるが、その存続を将来にわたって保障する価値が高いので、道民、苫小牧市民の貴重な財産として、早急に適切な保全対策を講じて、次の世代に伝えるべきと考える。フェンなどの湿原は気の遠くなる時間をかけてつくり出されたものであり、一度失えば回復はできないものとなる。以上のことから、わが国、北海道、そして地元の苫小牧市においては、安平川湿原の大規模フェンの貴重性が極めて高いことを認識し、その保全に努めていくことを強く要望する。



付図 安平川湿原の概況